

会員の声

受胎待ち時間調査法の 独創性について

フルタ マサシ ミヤオ マサル*
古田 真司* 宮尾 克*

(受付 2003. 6.13)
(採用 2003. 7.18)

文 献

本誌第50巻5号に掲載された「ヒト生殖能力評価手法に関する予備的調査」¹⁾を拜読した。内分泌攪乱物質によるヒト生殖能力の評価指標として「受胎待ち時間」を用いるという発想は、確かに新しいと思われるが、この論文の筆者らが、この種の調査が日本でされていないと主張していることに反論したい。

今から10年以上前の1989年～1992年にかけて、愛知県内の病院に勤務する助産婦(師)を中心とするグループが、今回の論文とほぼ同じ定義である「避妊をやめて妊娠するまでの期間」を「妊孕力」と定義し、喫煙や飲酒等の嗜好品と妊孕力の関係を報告している^{2,3)}。これによると、調査は愛知県内の総合病院11か所で行われ(今回の論文は1か所のみ)、調査対象者は714人であった(今回の論文では69人)。1992年の論文は、現場の助産婦の発想で行われた研究であるため、報告にやや厳密さを欠く各部分がみられるものの、調査内容は、今回の論文と同じ Baird らの研究⁴⁾を基礎として組み立てられている。その結果、妊娠までの期間は、喫煙者が平均8.64か月、非喫煙者は平均5.84か月であり、有意に喫煙者の方が長かったことを報告している。さらに今回の論文では認められなかったが、1992年の論文では、カフェイン摂取量によって量反应的に妊娠までの期間が延長することもはっきりと報告されている。

また、今回の論文の結果で最も疑問に思われる点は、年齢や、性交頻度による違いが現れていない点である。1992年の論文では、妊娠までの期間に最も影響を及ぼす因子は「本人の年齢」と「性交頻度(回数)」であった。とくに性交頻度は、当然、妊娠までの期間に強く影響を及ぼす因子で

あろうと考えられる。しかし、それらよりも魚の摂取頻度の影響力が強いという本論文の結果は、調査の方法についてやや疑念が生ずるとともに、日本でこのような調査を行う難しさを、あらためて提示していると思われる。

- 1) 荒川千夏子, 吉永 淳, 水本賀文, 他: ヒト生殖能力評価手法に関する予備的調査 受胎待ち時間調査法に関する検討. 日本公衛誌 2003; 50(5): 414-419.
- 2) 新井春美, 足立恵子, 小木曾みよ子 他: 「妊娠と嗜好」に関する調査(第2報)—飲酒・喫煙等と妊娠までの期間, および児の出生体重との関連—. 母性衛生 1989; 30(4): 721(会議録).
- 3) 鈴木和代, 足立恵子, 新井春美, 他: 「妊娠と嗜好」に関する調査(第2報)—妊娠までの期間および児の出生体重との関連—. 母性衛生 1992; 33(1): 17-21.
- 4) Baird DD, Wilcox AJ: Cigarette smoking associated with delayed conception. JAMA 1985; 253: 2979-2983.

* 愛知教育大学養護教育講座

2* 名古屋大学情報連携基盤センター
連絡先: 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学養護教育講座 古田真司